

百人一首
附錄方

女書訓子成詩
全



Red square seal impression with Chinese characters.



和歌三神

其一

玉津清明神

延久里

海

此世

あ

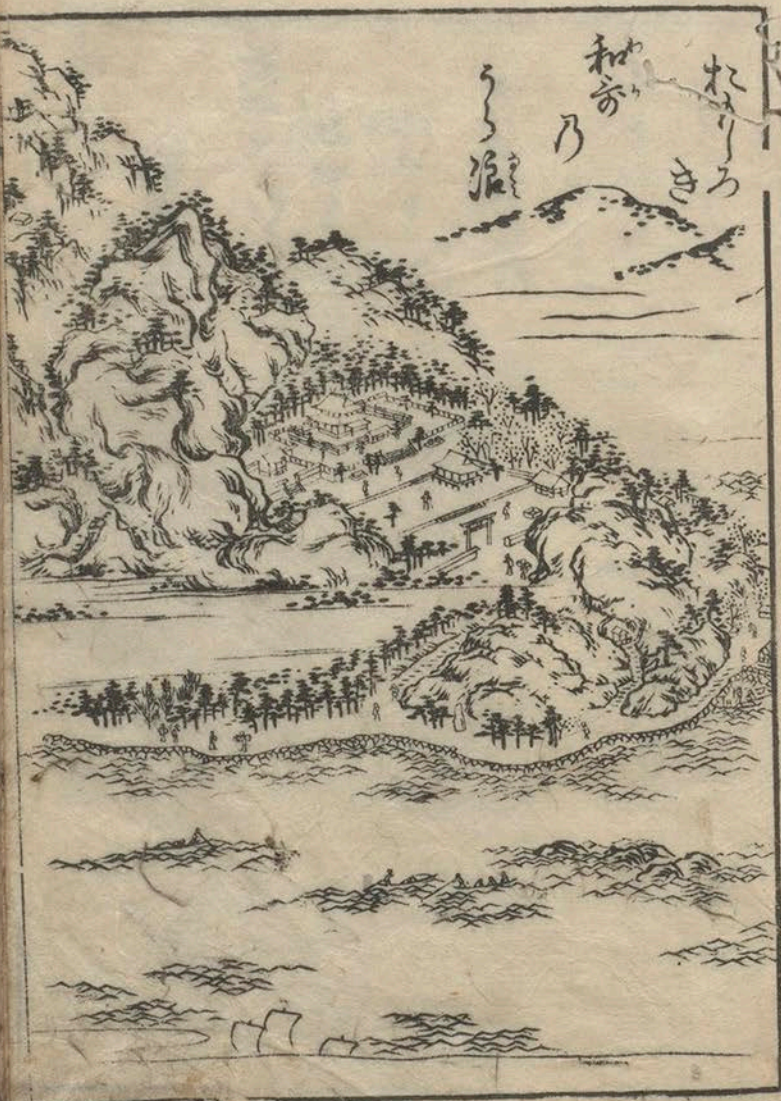
あま

名

和歌



和歌
乃
浪



其二

佐吉明神

あやとり

あやうき

あそび

あひれ

あう

あや

あくらん



佐吉明神
あやとり
あやうき
あそび
あひれ
あう
あや
あくらん



其三
人磨^{ひとすく}明^{あき}神^{かみ}

昭和人丸社の巻

不吐

70
7
3

の

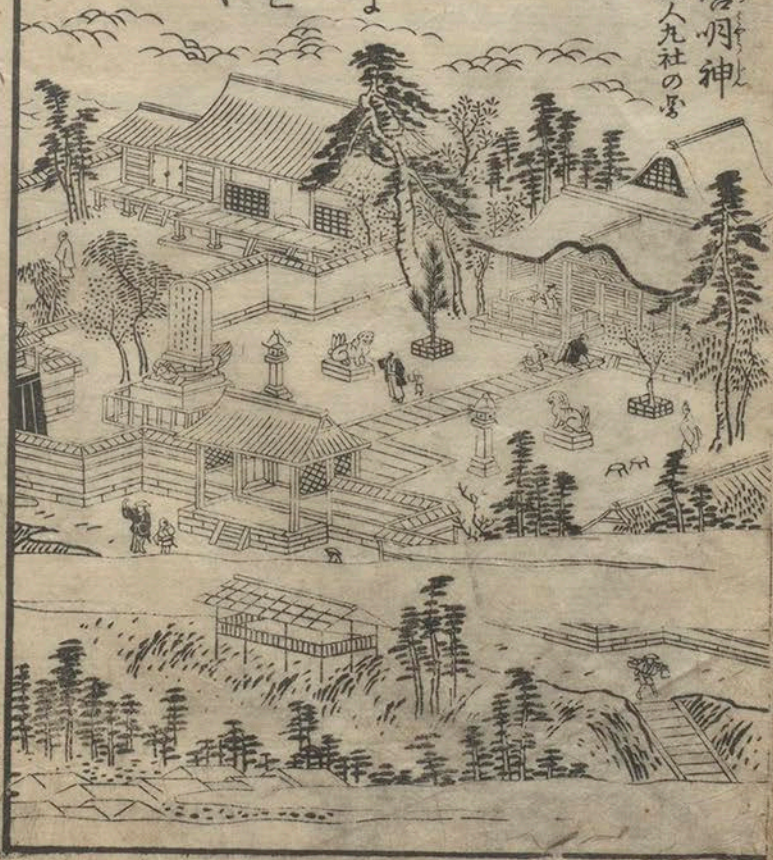
翔あき
ぎろろ

清心是

28
2

舟おしぞ

和



天智天皇

秋乃丹

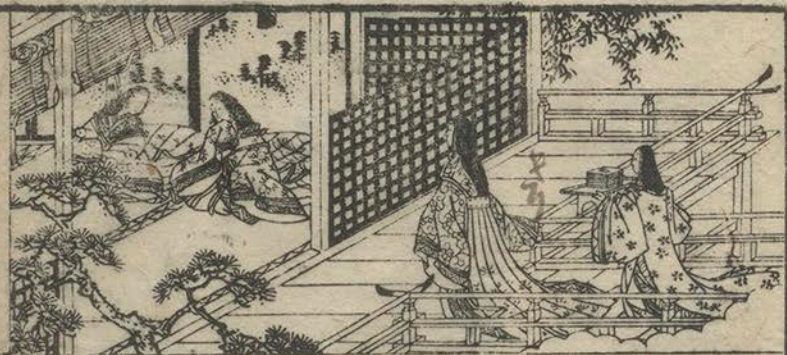
明子

菴の

名

わづな

あはれ



源氏物語の大意
いかにうへは書きおそまつ
際ふまはなからうか書置ま
つていづうき州紙やあそ
の邊へ寄つあつうき紙お
このうをてれとせまこと
作あるやうに作ていけあつ
あふ心けりるふ山の歌を
あふふまはなからうか書置
通疾どいふやうに付十
の夜の月御水ふつとん
もすみとてあつうか
かりの風情ふあうか
件の心書あつうか
紙とていふ料紙とてい

まづ彼方へのお尋ねと云
とありまは後御免なまゝにて
又十日後と云て申すも天
知あんなに遠くはなれぬやの事なれど
御云ひの如く書きてせしめ
寄附院へ下りせしめしけり
まふふ和紙の草紙なう
多くと云ふものやうな
すだうつわわごとになり式
ななくとも宛方海城と云は

持統天皇

ちり
 ま
 ちり
 ま

まふの
あふの
まふの

衣

天の

خم

柿本人麿

わ
電の

中

陸

おの

なぐさ

ひろく



わんぱく

うつゝのつれなきにあらざるは
 縁なきはあまを憂ひ合ふ
 うつゝにてもあそびあそびあそび
 けしきよきとほひあそびあそび
 うつゝのつれなきにあらざるは
 縁なきはあまを憂ひ合ふ
 うつゝにてもあそびあそびあそび
 けしきよきとほひあそびあそび



107

源氏十卷のうら
う十月のうら

[illegible]

夕

三

己卯

卷之四

2

三

花の



中細の家持

新乃々

ふ

わが
おの

志方

三

秋
更とろろ
なる



あ
べの
から
すう
安
倍
仲
替

天乃泉

2

子

1267

うすぢり
喜なる

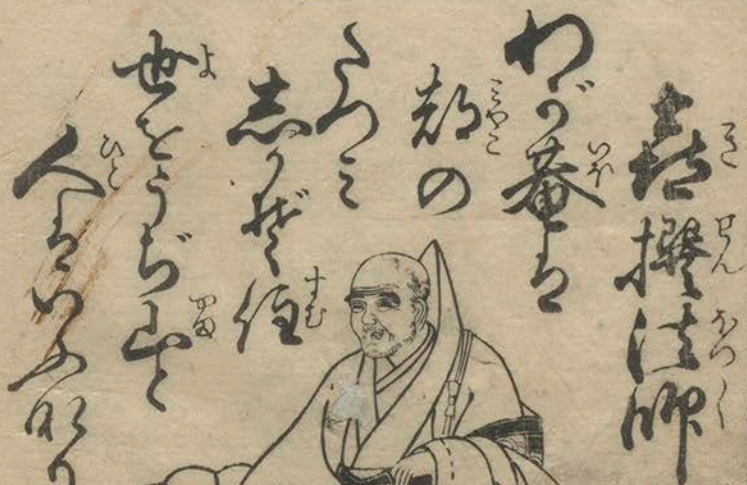
三三三三三

いふ

月二



七

[illegible]

世とらふ
 人々

五

すむ力のこほり
つゝのまゝなまむ

小野小町 とや ？ 乙 まら

花のさくら

うたふ

三

德

三

木
夢

あふ

七



十七名へ十月より
十八名の七月まで

100

あまの
神の
まへ
に
まを
さす



蟬セミ
九ユウ

此

५०

三

つ

志

あま



花のえん

二

十九日のこと
うらなう

大内南殿のたうりふむのゆき

25. *Amelanchier canadensis*

[illegible]

たふぬ恙と女に繋てむぢ方月如

東門外

[illegible]

Epistola de nobili ingenio in d. m. s. q.

三ノ三



やみ

わ



明
子
子

子

糸議重

わのゑ

ハヤ

4

借出

わ

子



百六

111

忙多より元と
如きとどつた

源氏の城に参る人かまかりと
 どもあつた。いふものこそわづらはし
 と東の山をたのめむとわづら
 ぶか。いふものわづらふとわづら
 とふ。いふものわづらふとわづら
 の上にはいふものわづらふとわづら
 の上にはいふものわづらふとわづら
 の上にはいふものわづらふとわづら



僧正遍昭

五津

の

か
し
ら

明

五

きんぎょ



三

此と方の九月も
せと方のとまを

(Handwritten Japanese text)

柳

神功

卷之四

柳子



陽成院

瓶
ぐ
の
の

峯

おろ

みま

無^もぞ^も焼^もて

海老



清氏二年春
の二月のう

この世の事どもあつてのやうに
 トウ
 る中へ流氏の御まじひも信と成
 ませうふ縁をあらすであう流氏か
 信たそさつひ信と成るぞ平良
 引おろしきナぬのふふら
 ひうのゝねわをもえさひ一時
この世
 すのもり人信と成るぞあふさひ
 うづいひのちの中きつうぢぢぢに



元良親王
元良親王

[illegible]

百人十一

まづ



久々年方の
杖のしるし

[illegible]

松風

22

卷之五

都

きん

七

之

素性仁厚

今

ば

なぐさ
むす
むす
の

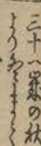
ありあけ

まらぶるい



百人十一

二千五百のやう
に、さうのやうで

[illegible][illegible]

朝魚



文庫
ぶ
やの
あ
ひぐ

吹ふ
大おほ

外

州



志

人
山
山
山
山

嵐とつむ

大に千里

月入まごころ

物もの
ト
シ
フ

か



我多ひる

杖わと
あ
ん
ど

同

二平二平のふ
うのふふと

大敵の痛むか、惟老のまゝ
 となくくさくさ病をば使
 氏よりいふこともあらず
 る者も亦難をあやうきと
 けびるまゝくさくさなり
 こひのまゝの病もまじり
 一かたより不幸なればな
 ここのおとわりのくさんとし



菅家かんけ

しづ

三

と

香山

もみぢの海

神乃まよ



三

二十四日 炭のすき
よりあてまで

まづの内情はかたね極まりなく
 中つひにうめひて飛ぶるやう
 初解ふすでとて後氏の忠内
 本道おひかう後氏のみなりと
 しそりていさなき我身あり
 と思はずと急ぐる然いふも
 りうの急激なるを後氏
 ぞとのこころ人海にまかせ

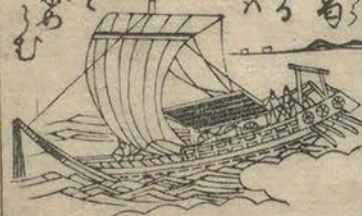
玉萬

卷八

そと
ふれど
ふろく

い
ろ
ろ
す
ぢ
と

三



二條右大臣

名なの

12

乃

三

今

あつち



附

二十六歳の又
月の事うとう

[illegible]

源宗千鶴

山やま 軍ぐん

冬

九

ま

人々を
と

かきあがり



となす



三千六百歳の

[illegible]

出市夏

卷之五

終

美

子孫

合



おふくちのこづ
丸の内町

心あふ

美

おん

初

あまのう

白

卷



かづ火



秋のふし

あつゝかまのふしなうらな
かまのふしなうらなうらな
あつゝかまのふしなうらな
あつゝかまのふしなうらな
あつゝかまのふしなうらな
あつゝかまのふしなうらな
あつゝかまのふしなうらな
あつゝかまのふしなうらな
あつゝかまのふしなうらな
あつゝかまのふしなうらな



壬生忠孝

おのの

はま

は

別

は

は



の



の

あつゝかまのふしなうら
あつゝかまのふしなうら
あつゝかまのふしなうら
あつゝかまのふしなうら
あつゝかまのふしなうら
あつゝかまのふしなうら
あつゝかまのふしなうら
あつゝかまのふしなうら
あつゝかまのふしなうら
あつゝかまのふしなうら

野分

あ

あ

あ

あ



坂上

は

は

は

は

は

は



二十四日 案の
十一月廿二日迄

御幸

卷之四

Learn

卷之六

ふつ

徳やう



ふくらんふくらん
ふくらんふくらん

家より大なるものなき

墨土屋のりくひろくろにまの

その有りなきと心懸のありを

一 甲のきとを、城より北の

ふくまふくまのふくまふくまのふくま

又、
又、

云々の空を飛ぶとて
まじく

卷之五



ねづけの

[illegible]

あはる



三

春道列樹

中

山に
せの

4

三

か
ら
い
も
の
な

人々

紀友則

久ひさの

吟

のどみ
書

けふ

あひら

ものゝ



百十七

すなごゝろ

同

三子をも衆の十
月より八の柱をも

無事のおれは、そのめけを
 せりて、大層なづのめけを
 ぬりぬりおのちへいりて
 一うへにひきめ、さきで
 ちへへ入る。今よそへ
 けりて、さきへいりて
 ちへへ入る。今よそへ
 けりて、さきへいりて
 ちへへ入る。今よそへ

志

室中

かきまろ

25

三



友東興風

唯

志人

五

ふりさこ

まもるむろ者

友^{とも}白^{しろ}あふ



紀
貫之

人

ko

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

くまのぞき

素白そはく



ふみえ
三十九卷の
心月のうき

源氏の老たき抱合あひかりてあ
る

やうきやうのめねあやうちう
やうきやうのめねあやうちう

たのらうとてうねた白ひもあら

神子^{かみこ}
まへに
おのりて

梅枝

花乃香
 ちほ



あふ
とほ

わき



蘇州



二十九年癸卯の正月
より千二百まで

[illegible]

きよはらのふかやふ
清原深養父

夏なつの夜よ

寓

あき

月の夜



わさ



字九葉より
年一の二回まで

むづしけぬるゑきよとてな
 ういふ月あめ白きと激成の
 りつゝいひさうといふれは
 よあらびりひく「すまのち」
 んん衆のすあきとさうひも
 まて我をもとををさうとそ
 めたひしなるべしとんきん
 はすの智えのゆへとてはなり

ぶんやのあそやと
文屋朝原

白落小

の

吹

杖つゑの

はる

玉とあふ



印

江戸九条の二月
 十七の年

(Handwritten Japanese calligraphy)

横筆



十

同

Handwritten text in a cursive script, likely a signature or name, possibly reading "Handwritten text" or similar.

八月廿四夜源氏女三のまへ
もくろひ人々あそびつゝおほ
かき／＼なふとあらはる虫の
中よりひとあひをみたまふ
源氏も是をみてむかしこそ
いふことのやうにせしむる
わがまづ／＼もえん／＼あふゆ
いそがしきはあふ／＼あふ

珍重

心
り
て

夢の

三

か
す
ひ

お



平五全

忠孝

出

我

あやめ

人



壬生忠元

少

七
 三
 二
 一

京

人



み十家の
十二月まで

五ノ下ノ三ノ下ノ二ノ下ノ一ノ下ノ

中
夕

100

あや

八

三

三ノ口

源氏平一罪の
よきようはまを

[illegible]

沖之

たふ

あま

卷之四

22の4



清原元輔

知々々々

うさぎ

神

夢

子

千原の雲山

たつた



中納言敦忠

逢ふ人の

九

行

三

ひし

おはなご





辛二 癸卯
壬子 乙未

[illegible]

之

大つと

42

善

22

5

少

自今迄の漢氏の

はまにちやうのふくやうのそ
うがうそにうそはいふのか

Wahlmänner der Provinz
Wahlmänner der Provinz

かうもあつたまゝにけふの松屋敷

わづらひておぼえしをいふ

わがを後々ふらふら

とあるは、ふくろのなかに

白雲
の
う
る

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

張
子

中納言 忠

逢年の

三

72

六

卷一

人々

五

二

謙徳公

辰

子

3

一

あ
う
く

かのうぢ

2

卷之六

[illegible][illegible]

聖

ナニ

あらばい



おのれはたのむしあまの
いかにひがみまをさる
のうたをなぬまひうたの
いかにひがみまをさる
大綱をさるまをさる
て梅うたをさるまをさる
といふまをさるまをさる
いかにひがみまをさる



なはて



あつちのあつちのあつち
うたをなぬまひうたの
あつちのあつちのあつち
てあつちのあつちのあつち
あつちのあつちのあつち
あつちのあつちのあつち
あつちのあつちのあつち
あつちのあつちのあつち

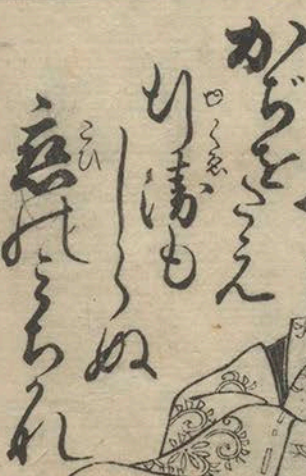


夢ねの
夢ねの
夢ねの
夢ねの

中良

かたを
り清も
いれられ

船人



あつちの
あつちの
あつちの
あつちの

八重

あつちの
あつちの
あつちの
あつちの

あつちの
あつちの
あつちの
あつちの

あつちの
あつちの
あつちの
あつちの

あつちの
あつちの
あつちの
あつちの

あつちの
あつちの
あつちの
あつちの



けいひめ  けいひめ

うしろのふりそめあつてつづの
 るくすけのさゆ氏のいぢぢ
 けいひめのふりそめあつてつづの
 わのふりそめあつてつづの
 おゆ氏のふりそめあつてつづの
 わのふりそめあつてつづの
 おゆ氏のふりそめあつてつづの



源重之 

風をいふ

岩の

水の

おの

くけ

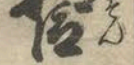
あつてつづの



おひめ  おひめ

うしろのふりそめあつてつづの
 るくすけのさゆ氏のいぢぢ
 けいひめのふりそめあつてつづの
 わのふりそめあつてつづの
 おゆ氏のふりそめあつてつづの
 わのふりそめあつてつづの
 おゆ氏のふりそめあつてつづの



おひめ 

おひめ

おひめ

おひめ

おひめ

おひめ

おひめ



宇原の多三 うはらのたさん 川 かわ へい へい まで 姫 ひめ あさ あさ づら
 い い と と くら くら ぶ ぶ 赤松 あかまつ の 宮 みや へ へ かる かる
 あ あ ち ち 縁 えん とう とう づ づ じ じ ぶ ぶ ざ ざ ゐ ゐ
 う う ち ち ず ず しく しく 日 ひ ぶ ぶ を を ふ ふ 柳 やなぎ
 ま ま ぎ ぎ ら ら ぬ ぬ き き ぬ ぬ ぐ ぐ じ じ ぶ ぶ ち ち ゐ ゐ
 じ じ ぶ ぶ じ じ ゐ ゐ ち ち ず ず ず ず ち ち ず ず ち ち ず ず
 ち ち ず ず ち ち ず ず ち ち ず ず ち ち ず ず ち ち ず ず
 ち ち ず ず ち ち ず ず ち ち ず ず ち ち ず ず ち ち ず ず

あがら

ながさ
ちぎる

結

おろし

五



友東義若

君がめ

子

52

部

やぶもろこ

に
い
る



さわび

宇治のまゝをねよう

[illegible]

とまひておぼしめす

例のうらびをまゐる

此の文を
 此の文を

まゝのりてゐる

トキヲシテハ
カミナリ

三

子歆

[illegible]

是



る
ま
び



ふらりうのきゆうこめ
あそん
飯茶美芳軒

かき

んやち

子



三

[illegible]

鳥思もひを



くちのたこやう
はのやまむ

[illegible]

室本



うりやうやの
八九月

[illegible]

東屋



夜東道行

あひ
あひ

善

あき
あき

不暇

物^{もの}がけ^{がけ}ち^ち



右將の理

難なうう母は

[illegible]

あ
まの

久米

和後



ちやうど
 ありてはるかにありてはるかに
 ういふはるかにありてはるかに
 あらてはるかにありてはるかに
 又あらてはるかにありてはるかに
 あらてはるかにありてはるかに
 あらてはるかにありてはるかに
 あらてはるかにありてはるかに
 あらてはるかにありてはるかに
 あらてはるかにありてはるかに



ちやうど
 ありてはるかにありてはるかに
 ういふはるかにありてはるかに
 あらてはるかにありてはるかに
 又あらてはるかにありてはるかに
 あらてはるかにありてはるかに
 あらてはるかにありてはるかに
 あらてはるかにありてはるかに
 あらてはるかにありてはるかに
 あらてはるかにありてはるかに



儀同三司
 ちやうど
 ありてはるかにありてはるかに
 ういふはるかにありてはるかに
 あらてはるかにありてはるかに
 又あらてはるかにありてはるかに
 あらてはるかにありてはるかに
 あらてはるかにありてはるかに
 あらてはるかにありてはるかに
 あらてはるかにありてはるかに



大納言
 ちやうど
 ありてはるかにありてはるかに
 ういふはるかにありてはるかに
 あらてはるかにありてはるかに
 又あらてはるかにありてはるかに
 あらてはるかにありてはるかに
 あらてはるかにありてはるかに
 あらてはるかにありてはるかに
 あらてはるかにありてはるかに



うゑるせふと云
のこをうゑす

[illegible]

中
の
に
て

うゝ船のわきふわりとをか
つづのやうにそよ風「は」といふ
もののほれ竹をそよ風とぞ
こまねせめつかりさひしめ
来ふなりぬともささるる
くちくちのうすてまろの一字
かゝりまろき世の盛衰をみ
夢の如くとさるるらん

夢浮槐

はの

ふせ

みち

壹

三

卷之六

當



和泉式部

わづらん

けをの

不
凡

松

いづれの

あま

子



ひょうきょう
式部

父
子
人
兒

三

子

貧乏

くち

衣よのい

月
如



押し添はね ころのつるまの
 めあつてそなたの情を
 表し ぬきぬきとて
 わるきもやうに 義入
 常とあつてす 我目年々
 老のふねをふておふ
 こゝろをわすれぬやう
 休のふとねとてあつ
 若と節めあきとてす
 かゝるもまづ男女のなひ
 とさるゝふさつてやう
 我とてわづかふさう
 と今いふことを 祝
 わきとて ぬきぬきとて
 若と節めあきとてす
 のこゝろとて 祝の大意
 吾輩のやうに 佛徳の志



やしとてあつて ぬきぬきとて
 若と節めあきとてす
 のこゝろとて 祝の大意
 吾輩のやうに 佛徳の志
 わきとて ぬきぬきとて
 若と節めあきとてす
 のこゝろとて 祝の大意
 吾輩のやうに 佛徳の志



[illegible]

すまののなんー
目端
春の
あづり
とま
し
名
と
と



○室の目今男はちふ
 さんあつとさふ病をさふ
 かりとさふ振かりひく
 つつとさふ男をさふさる
 たりひささうとさふさる
 万幸女とさふとさふさる
 いんさるさるさる
 女は知さるさるさる
 とさふさるさるさる
 丈夫切とさふさるさる
 とさふさるさるさる
 たりさるさるさるさる
 まるさるさるさるさる
 とさふさるさる
 ○室信元曰ちあつとさふ
 ちあつとさふさるさる
 たりさるさるさる

祐子内親王家
 紀伊
 高あさ
 の
 あさ
 うげや神の
 ねまもて
 くれ



○室の目今男はちふ
 さんあつとさふ病をさふ
 かりとさふ振かりひく
 つつとさふ男をさふさる
 たりひささうとさふさる
 万幸女とさふとさふさる
 いんさるさるさる
 女は知さるさるさる
 とさふさるさるさる
 丈夫切とさふさるさる
 とさふさるさるさる
 たりさるさるさるさる
 まるさるさるさるさる
 とさふさるさる
 ○室信元曰ちあつとさふ
 ちあつとさふさるさる
 たりさるさるさる



中納言道房
 まさ
 ゑ
 ねふ
 ねふ
 まさ



[illegible]

びんごんのふり
 殷富院大権

人まげや

山と
夢の

あゝ

神子由

ねまふぞ

五十六

小笠原流於

友の乃々

三

すまひろ



あつと

3

あまのこ

すゝ

清和天皇

養なぐや

賣よ
新夜の

七

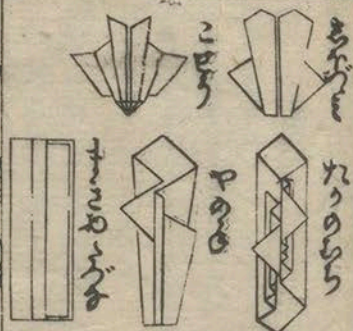
系

每

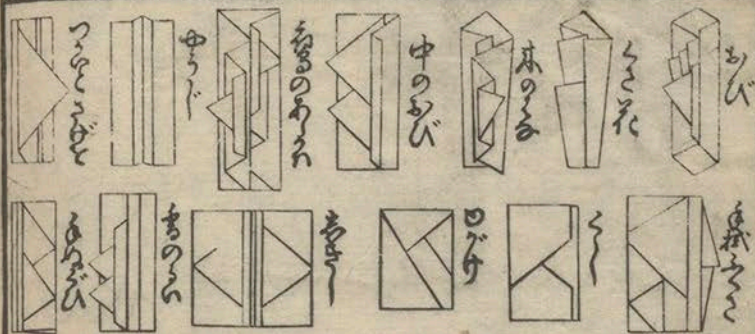
中
子

中
時
拜





謙余右大臣
 中平の考
 かくも
 満る
 あふれ
 する



二條院嬪
わづ神
うゑ
か
人
か
か



入

ふみ
ふみ



百八十四十九

権柄と定家

あ

生々々々

浦の

中

くまの

所を
たづ
ね



書林

跡見学園女子大学短期大学部図書館



a0010459048a

43960

天保八年丁酉四月再刻

浪華書林

松島橋筋以基町

柏原屋清右衛門

画工

法橋關月



彫刻

樋口與兵衛

女用月
正月 二月 三月 四月 五月 六月 七月 八月 九月 十月 十一月 十二月

あけぼの月 春の月 夏月 秋の月 冬月 正月 二月 三月 四月 五月 六月 七月 八月 九月 十月 十一月 十二月

順徳院

百あや

あや

あや

あや

あや

あや



増大百十九

堂州白林書

入代五ノリ

百人一首

浪華書林

柏原屋清右衛門

公氣格物以茶所

天保八年丁酉四月再刻

43960

彫刺 樋口與兵衛

画工 法橋關月



十二月	十一月	十月	九月	八月	七月	六月	五月	四月	三月	二月	正月	女用
十二月	十一月	十月	九月	八月	七月	六月	五月	四月	三月	二月	正月	女用
十二月	十一月	十月	九月	八月	七月	六月	五月	四月	三月	二月	正月	女用
十二月	十一月	十月	九月	八月	七月	六月	五月	四月	三月	二月	正月	女用



順徳院

百あや

うさぎ

うさぎ

うさぎ

うさぎ

うさぎ

増大百十九

五古四書之

見世用

新田榮

新田